

教 仁 名 聞

第59号
(発行日)
2015年8月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》
○〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始。
○〈念仏座談会〉
毎月2日と12日午後3時始
○〈聖典学習会〉
毎月6日午後7時始。
○〈真宗入門講座〉
毎月18日午後6時30分始。
* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

彌陀初会の聖衆は

彌陀初会の聖衆は
算数のおよぶことぞなき

浄土をねがわんひとはみな
広大会を帰命せよ

(「浄土和讃」)

(現代語訳) 法蔵菩薩が成仏されて阿彌陀如来になられ、最初に説法されたとき、聴聞される浄土の聖者方の数は、とても数をかぞえることができないほど多い。浄土往生を願う人はみな、どのような衆生もわけへだてなく平等に救いたもう法をお聞かせ下さる、そのような広大な会座を開きたもう阿彌陀如来に帰命せよ。

* * *

このご和讃も、曇鸞大師の『讚阿彌陀仏偈』に出てきます。す
「阿彌陀仏の初会の衆は、声聞・菩薩の數無量なり。神通巧妙にして算うることあたわず。このゆえに広大会を稽首したてまつる。」

をもとにして作られた親鸞聖人のご和讃です。
如来法蔵様は、私たちが苦

しみと悪の汚れのなかにあつて、そこから出ることができないことをあわれみたまひ、みそなわしたまいて、私たちにまことの安らぎをあたえ、

すべての罪悪を浄化して、清浄にして無量のいのちである仏になさしめたいという願いを發されました。そして私たちに代わって私たちに代わって長い修行をして下さいました。

こうして一切衆生を救い得る仏、すなわち南無阿彌陀仏になられ、その救いを告げ知らせして下さいさる。

それが、私たちの耳に聞こえるお念仏の声であります。この事は何度も何度も聞かせていたたくべきことがらです。また聞いても聞いても聞きあかぬ大慈大悲の不可思議なまことであります。

こんな不可思議な恵みがすでに私たち一人ひとりには働きづめに働いておられたのです。このような如来法蔵様の御苦勞と恵みを今まで知らなかったことはもうしわけない

ことであり、はずべきことなのだと
思います。これに
ついて念仏者松並
松五郎さんが

○光輝く西方の

安樂浄土の我が親は
自ら慈悲の使者となり
釈迦となりては八千返
宗祖となりて三國に
和國に親鸞また蓮如
波のよせかけ帰る如く
難作能作の御苦勞も
私一人が御目当てと
知らぬ昔がはずかしや

見ざる言わざる聞かざる
と
役ない事に立ち寄るな
善きも悪しきも縁次第
心の駒はどこえ行く
地獄か餓鬼か畜生か
自業自得で三毒の
苦海にあえぐ私を
しつかとい抱いてみ仏は
安樂浄土へ連れてゆく
知らぬ昔がはずかしや

不可称不可説不可思議の
仏の御智慧を頂けば
娑婆の苦惱はどこえやら
心はうきうき喜びが
小さな胸にあふれ出し
思わず口に称名が
称えて光る活仏
御恩の中から芽を出して

とうたつておられます。
ここに「知らぬ昔がはずかしや」とのこと。このような大慈大悲の御苦勞を今まで知らうともせず、聞こうともしないで、ながながと流転し続け、「俺が」「私が」と我が身を立てること、我が身を護ること、自分の安樂のみを求めて走り回ってきたこと、そう

《 盂蘭盆会法要 》

八月十日(月)

午後二時始まり

* * *

*法要の際、法名をご持参下されば仏前に安置させていただきます。
*八月十二日と八月二十二日の集まりはありません。
*八月二日(座談会)・八月六日(聖典学習会)はあります。

いうことはお慚かしいことだ
と思います。

ここで松並さんが「難作能
作の御苦勞」というのは、私
たちを救わんがために如来法
蔵様がながながと難行・苦行
のご修行を私に代わって勤め
て下さった、ということですよ。

このような不思議な話は信
じられないと言われます。信
じられないのも無理はありません。

この如来法蔵様の話は実に
不可思議な話であり、これに
よる南無阿弥陀仏のお助けは、
不思議ゆえに「極難信の法」
であると釈迦仏がすでに説い
て下さっています。

南無阿弥陀仏は「信じるこ
とが極めて難しい法なのだ」
と釈迦仏が、私が信じにかか
ろうとするに先立って仰せ下
さっています。ですから私た
ちが「如来法蔵様のご苦勞で
出来上がった南無阿弥陀仏は、
助からぬ私をまるまる引き受
けてお助け下さる法」である
こと、そのようなことを私た
ちが信じていることが出来ない
のは、もう阿弥陀仏や釈迦仏の
勘定済みですよ。

ですから「私は信じられな
い」と本当に感じたら、「そう
だ、お前の頭で信じていることが

なぞ到底できるような小さな
話ではない。とても不可思議
な恵みであり、驚嘆すべきこ
とがらであり、ここに限りな
い慈悲があるのだよ」とい
う仏様のお心を聴けば、自分
の頭では信じられなくても、「信
じられないほどの広大な大悲
のお助けなのだ」とすなお
に受け取ることもできるので
はないでしょうか。

私たちを慈しみ、自分で取
り除くことの出来ない私たち
の悪罪を引き受けて下さり、
仏に為して下さる大慈大悲が
ましますということは、実に
不思議な、それこそ有ること
の難い、いわば有難いことな
のですね。

ただ、不思議と言えばこの
世のことにも不思議なことは
いっぱいあります。たとえば、
親が子を産むと、その子を親
が「可愛い、可愛い」と愛す
る心が起こって、子供にお返
しを求めずに愛し育てる。そ
ういう身近な事実も不思議で
はないでしょうか。子供が病
気になれば、治るまでは心が
休まらぬ親心。自分は食べな
くても子供にまず食べさせた
いとまで思う親心。なぜ生ま
れた子供に対して理屈なしに
愛さずにはおられないのか。

これは人間だけではなくホカ
の動物も同じですよ。「どうして
親は子を愛するのか」、これは
当たり前のことではなくて不
思議ですよ。またこういう不
思議があればこそ、生まれた子
供が育つのです。こうした親
子の情でも不思議ですよ。

そうすると生きとし生ける
ものを愛し、苦しみを除き真
の安らぎを与えたいという広
大な慈愛の働きが、私が求め
たり気がついたりする前から
働いていて下さっていること、
この阿弥陀仏の大慈悲によっ
て私は、子が母の愛情によっ
て育つように、真理の領域へ
と育てられていくのでしょうか。
それは不思議の中の不思議で
すが、それを知らせて下さっ
たのが釈迦仏であり、『仏説無
量寿経』のお言葉ですよ。

こうして法蔵菩薩様は阿弥
陀仏に成られ、阿弥陀仏に成
られて初めての説法の座を、
このご和讃で「**弥陀初会**」と
申されるのです。

その最初の説法の座に集まっ
てこられた菩薩方は「算数の
およぶことぞなき」で、数え
きれないほど多いとおっしゃ
るのです。これは『仏説無量
寿経』に釈迦仏が
「**かの仏（阿弥陀仏）の初会**

の**声聞衆の數、稱計すべから
ず。菩薩もまた然なり。**」
とお説き下さっているところ
ですよ。

阿弥陀仏の説法を聞いてい
る方々を「声聞衆」「菩薩衆」
あるいは、この和讃では「聖
衆」と説いておられます。

こういうお経のお言葉を通
して、教えられることを伺い
たいと思います。

先ず、阿弥陀仏の初めての
説法ということですが、釈迦
仏にも「**初転法輪**」というお
話があります。

釈迦仏は二五〇〇年ほど前
にインドにお生まれになり、
三十五才で悟りを開かれて仏
陀すなわち真理に目覚めたお
方になられました。そして悟
られた真理を人々にお説きに
なりました。

インドのバラナシの郊外に
ミガダーヤ（鹿野苑）という
処があり、釈迦仏の居られた
頃は、修行者たちが集まって
修行をしていた処です。釈迦
仏は悟りを開かれてから、こ
のミガダーヤまで行き、そこ
で初めて五人の修行者に説法
をされました。これを
「**初転法輪**」といいます。こ
こでいう「初会」（初めての説
法の座）ですよ。

ただ釈迦仏の説法はその後
八十才までいくたびもなされ
ました。それに比して阿弥陀
仏は初めて仏法を説かれて、
その説法の終わりは説かれて
いません。

なぜか。それは釈迦仏は人
間ですから、人間のなすこと
には初めがあれば、中があり、
終わりがあります。しかし阿
弥陀仏は人ではありません。
光明無量・寿命無量を本体と
して現れて下さって仏（報身
仏）ですよ。いわば無限なるお
方ですよ。阿弥陀仏は無量者で
すが、法蔵菩薩として御修行
になつて阿弥陀仏に成られた
という面から言うと始めがあ
る、いわば有始ですよ。しかし
終わりがないので、阿弥陀仏
は（有始無終）の仏様とも昔
から言われています。初めが
あるけど終わりは無い。

阿弥陀仏は最初に説法され
ても、それが終わって、また
次の機会に説法するという人
間の説法ではなく。説法を始
めると中断がない。いつもい
つも説法しつづめだといわれる
のです。人間の説法のように
説法と説法の間に中断がない、
不断なのです。

量りなきいのちであり量り
なき光である阿弥陀仏の説法

は恒常的に説法しておられるのであります。それは阿弥陀仏が法蔵菩薩の時に誓いを建てておられ、次ぎのように仰せ下さっています。

「我仏道を成るに至りて名^{みょうしやう}声十方に超えん。究竟^{くわいじやう}して聞こゆるところなくは、誓う、正覚を成らじ、と。衆のために宝蔵を開きて広く功德の宝を施せん。常に大衆の中にして説法師子吼せん」(『仏説無量寿経』)

「我仏道を成るに至りて名^{みょうしやう}声十方に超えん。究竟^{くわいじやう}して聞こゆるところなくは、誓う、正覚を成らじ」とは法蔵菩薩は「私は仏となつたら、南無阿弥陀仏の名声(名号)となつて、十方衆生にどこどこまでも聞かせずにはおかない」と誓い、そして、「常に大衆の中にして説法師子吼せん」と仰せられています。すなわち「常に生きとし生けるものに説法をしたい」と誓われました。「常に」とは間断がなくという事です。それが成就して、阿弥陀仏は説法を初められたら、あとは中断がなくて常に説法したまうのです。

では阿弥陀仏の(常の説法)とは何でしょうか。それは名^{みょうしやう}声(南無阿弥陀仏の名号)と

なつてお聞かせ下さる説法です。如来法蔵様は南無阿弥陀仏となつて現在も私たちに説法しづめなのです。それを『阿弥陀経』では(今現在説法)(今現にましまして説法したまへり)と説かれています。

生きとし生けるものに(南無阿弥陀仏)と、いわば名号となつてお聞かせ下さつてい、それが阿弥陀仏の説法なのです。

このような名号説法が「響流十方」(『仏説無量寿経』)で、「響き十方に流る」すなわち「響き十方世界の十方衆生に流れ」ているのです。その名号説法は今も私たちのためににされておられ、その働きが称名念仏のところに、私の口を破つて南無阿弥陀仏として、人の声となつて現在に現れて下さるのであります。

やさしいたとえで云いますと、テレビの電波は全国いたるところに常に流れています。テレビのスイッチを押すとテレビ画面に映像と音声が見えます。このように、いつも流れている電波の如く阿弥陀仏の名号説法は常に万人に喚びかけておられます。

そして、実際の称名念仏において、すなわちナムアマミダブツと称えるところに私の上

に現われて下さいます。まあいつてみればTVのスイッチをいれると画像と音声が見れるようなものではないでしょうか。これはどこまでもたとえですが、大体のイメージはつかめると思っています。

南無阿弥陀仏とお念仏しますと、そのお念仏の声において阿弥陀仏の説法が私の上に現実的に流れるのであります。もう一つ言うと、どんな縁でも南無阿弥陀仏と称えると、その一声一声が阿弥陀仏の説法であります。阿弥陀仏の常説法が私の一声の念仏において、私への説法として現在に行じられてくるのです。

ではその阿弥陀仏の説法とはどういう内容かという、ややこしくはないのです。それは阿弥陀仏の勅命^{ちやくめい}と

言われています。すなわち阿弥陀仏が、死に囲まれ、罪に染まつている私たちをあわれみ、願を起し修行成就して「助ける」「引き受ける」と仰せ下さるので「助からぬものを助ける」「弥陀がここにいる」とのやるせなき説法です。

短いですが、それで充分なのです。この大悲の説法において、(私は阿弥陀仏と

ともにいる)、(阿弥陀仏は私をおさめ取つておられる)、(阿弥陀仏は浄土へと連れていつて下さる)、(阿弥陀仏は私の罪業を引き受けたまう)と、知らされるのです。

このような阿弥陀仏の説法は浄土における聖なる菩薩(聖衆)ばかりでなく、十方世界のどこにおいても聞きうるのであります。その阿弥陀の説法を聞いた人、信じた人は菩薩(聖衆)に連なるといつて

いいでしょう。そうすると、その数は数えきれないほどになります。しかも初会においてなされる名号説法は永劫に続いていきますから、阿弥陀仏の説法をすでに聞いた者、今聞いている者、将来に聞く

者を数えるとかぞえきれないといえましょう。

最後に、如来法蔵様の説法を聞くことにおいては、聞く側に一切条件はありません。善悪、賢愚、男女、老少、などの人間的差異はまったく問われませんから、いつでもだれでもどこでもお聞かせいただける説法です。

それゆえ阿弥陀仏の説法の座は一切衆生に開かれている。廣大無辺の座と言わねばなりません。この普遍的な広大な会座^{えざ}を可能にしている功德である阿弥陀仏に(帰命せよ)と仰せられ、阿弥陀仏の大悲の誓願(お助け)によりかかれ、よりのめと勧め^{すす}められるのであります。(了)

《二〇一四年度東本願寺基金御懇志報告》

懇志者名一(敬称略) 青木宏克。赤股一夫。秋常芳子。浅野真由美。足立美明。幾代禮四郎。石川紀美子。石田君代。石田豊司。井上猛。井上守。岩谷龍。岩田能一。植田節美。宇田瑠璃子。小澤ちづ子。香川郁夫。角谷節代。笠井慶子。加藤忠。萱島聖志。川端靖雄。窪ナル子。児玉慶子。佐藤孝幸。下野誠二。下野知恵子。城越洋一。新保弘吉。寿賀晴剛。鈴木嘉子。谷村往世。津田元親。寺坂典子。土居令子。長井一江。中野タカ子。中村喜保枝。中村俊一。中村千和男。中村暢明。中村羨子。中村穂積。中村ホミ子。中村美重子。中村幹夫。中村美登子。中村康義。中山緑。七村文子。西塚祥子。西山恭夫。能戸昇志。野原佳子。長谷川満。泰京子。濱秀子。早川森弘。林久司。原崎佳水。平林憲子。福井靖弘。福村義明。藤村静。前田ふくの。町百合子。町嘉嗣。宮伊勢子。三宅真知子。宮野勲。宮野エイミ。宮野道子。室塚良治。森和子。森野茂治。山下悦子。山下東洋栄。山下征洋。山科春良。横田ミチ子。吉岡正人。吉田徳子。吉ノ菌陸枝。亮木与志。

以上の皆様方より御懇志を賜りました。総額二六五〇〇〇円になりました。大谷派(東)本願寺の方に納付させて戴きます。有難うございました。

木村無相さんの法信 35

(昭和五十八年十一月七日のお便り。ご往生される二ヶ月前です。無相さん八十才)

(前号からの続きです)

* * *

そして、

ただ念佛してミダにたすけられまいらすべし

の「仰せ」は、凡夫無相のイワユル「心」からの

信じてまいるも

タノンデまいるも

ハカライなく、如来にマカセルということも

一切、凡夫無相の心に属することは落第の身にとつては

ただ念佛して

ミダにたすけられまいらすべし

と、よきヒトの仰せをかぶりて、

信ずるホカに別の子細なきなり

の「信ずる」とは、イワユル、凡夫の信じ心での信心ではなくして、

「よき人の仰せ」

「如来のお勅命」のまんまに、

「ただ念佛せよ」とのよき人の仰せ、如来の「勅命」のまんまに

ただ念佛すること

ただナムアマミダブツ ナムアマミダブツ

と、オーム念佛すること、発音念佛申すこと、そのこと、

ただ称えること

○ ということの実際でした。

○ 凡夫無相のイワユル「心」には関係なく、

ただ「口」に称えることが、この場合の

信ずるホカに別の子細なきなり、

ということなのでした。

○

○ そして、それが、善導大師さまの「加減

の文」

若我成仏 十方衆生 称我名号

下至十声 若不生者 不取正覚

オススメ通りなのでした。

○

○ 聖人の『唯信鈔文意』、聖覚法印の『唯信鈔』のソノトコロを拝読するとわかります。

「ただ口に称える」ということの御真意が、

又『観経』の下々品の

汝 若不能念者 应称无量寿仏

のお心がわかります。『善導大師』の「加減の文」も、ここから来ているとのことで

ありますが、そうであろうと、ただかれ

ます。

○

○ そして、大切なことは、

「よき人の仰せ」

「如来の勅命」の

まんまに、

「ただ念佛する」

という、そのままが、はからずも、

(一)よき人の仰せを信じ

如来の勅命を信じる

ことになっていたのでありました。

(二)弥陀をタノムということになっているのでありました。

(三)ハカライなく、本願にマカセルということになっていたのでありました。「無義」ということになっていたのでありました。

○

○ これは実に不思議な「助け方」であります。

○ 凡夫の心としては、信じられぬ、

タノメぬ、

ハカライなく、弥陀に

マカセラレヌ、

まんま

「極重悪人唯称仏」

称我名号

ただ念佛して

加減の文

のまんま、

ただ念佛申すことにおいて、

はからずも、

本願を信じ

たのみ、

ハカライなく

弥陀にまかせる

ということになっているのでありました。

○

○ 我れとしては絶対不可能なことが、ただ

よき人の仰せ

如来の勅命のまんまに、

ただ念佛申すということにおいて

はからずも、

成就せられているのでした。

○

○ それで、

「よき人の仰せ」

「如来の勅命」の

まんまに

ただ念佛申す以外に、

本願を信じたり、

ミダをタノミにしたり、

ハカライなく、

マカセル

というようなことは、ぜんぜん無用なこと

でした。

○

○ わが生死出離の道は

ただ念佛申すこと、

それだけで充分なのでした。

○

○ 「よき人の仰せ」のままに

「如来の勅命」のままに

ただ念佛申すことが、

能く衆生一切の無明を破し、能く衆生一

切の志願を満てたもう

ことになっていることで、

ただ念佛

に充足されて、ホカにナニ一つ、ホンモノ

(御法の上で) がなくなったハズです。

○

○ 「念佛は無義を以て義とす」

「よき人の仰せ」

「如来の勅命」のまんまに、念佛申すこと

が無義の念仏なのでした。

○

○ 念佛は無義をもて義とす

ハカライ無き(無義)が上ハカライでした。

○

○ 今の私には、御法の上にナンの問題もあ

りません。ただ念仏だけで。

○

○ それはナニモカモ、ワカッタからではな

く、真宗教義のことナニ一つわからぬまま、

ただ念佛一つ

にて、お助け下さるという「如来の御本意」

を

ただ念佛せよ

の仰せのまま、

ただ念仏申す以外に、

本願を信じたり、

(続く)